

戦前期における神奈川県社会施設に関する一考察  
—神奈川県匡済会が手がけた横浜社会館と川崎社会館を中心に—

姜 明采 (神奈川大学)

■ はじめに

横浜をはじめとした神奈川県では、資本主義の急激な発展による労働者層及び都市貧民層の増大や1918(大正7)年の米騒動などにより多彩な社会施設が登場されたが、1923(大正12)年の関東大震災により壊滅的打撃を受け、社会事業のみならず都市全体の計画が転換期を迎えた。本稿は、戦前期における神奈川県社会事業を建築史の観点から検討する第一歩として、関東大震災以前に建てられた社会施設のうち神奈川県匡済会(以下、本稿では「匡済会」と称する)が手がけた横浜社会館と川崎社会館に注目し、その建設過程と建築的特徴から社会施設としての特徴を考察するものである。

■ 神奈川県における社会施設の建設計画と神奈川県匡済会の設立

神奈川県では前述した米騒動による社会不安のため1918(大正7)年より公設市場や職業紹介所、公設浴場など社会業施設の建設が急がれた。この動きに合わせて、1919(大正8)年10月20日には細民生活の状態を調査し救済方法を講じる団体として「神奈川県救済協会」(のちの「匡済会」)が設立される。設立当初は神奈川県知事・有吉忠一が会長を務め、横浜の財界をリードする財界人が理事として名を連ねていた。

■ 第一労働者宿泊所として計画された横浜社会館

1919(大正8)年8月1日、匡済会の理事会では労働問題を解決するため、労働者宿泊所を建設する計画が可決された<sup>1)</sup>。建物は長らく社会施設として機能させるため鉄筋コンクリート造を用いる<sup>2)</sup>こととし、敷地は官有地であった横浜・県立高島町公設浴場の隣地で決定された<sup>3)</sup>。

1919(大正8)年11月6日付の『横浜貿易新報』では、建設計画の詳細が報じられた。鉄筋コンクリート造3階建ての建物に、独身の男性労働者約600名を収容する宿泊室約80室のほか、簡易食堂、職業紹介所、散髪室、診療室、談話室、娯楽室等を設けるなど、これまでの労働者宿泊所と異なる、低給生活者等の慰安と教化まで視野に入れたもので、こうした総合的な社会施設は横浜市において最初の試案であったという<sup>4)</sup>。

匡済会顧問であった東京帝国大学教授・佐野利器の指導のもと、神奈川県内務部土木課建築技師・成富又三が設計を担い<sup>5)</sup>、1921(大正10)年5月15日、横浜社会館は当時流行した洋風意匠を用いた鉄筋コンクリート造3階建ての建物として開館された。また、同年6月20日の『横浜貿易新報』の宿泊者感想によると、「一寸『夜のヴェルサイユ宮殿』と言ひたい<sup>6)</sup>」とされ、宿泊室は採光と通風が十分に取れていること、床は虫

を防ぎながら夏は涼しいキルク材を敷いている<sup>7)</sup> ことなどが記されていた。このことから、横浜社会館は最新の建築物として外観デザインに多くの注目が寄せられ、その内部は共同生活のため衛生面に留意して計画されたことが読み取れた。

## ■ 第二労働者宿泊所として計画された川崎社会館

1919（大正 8）年 12 月 13 日、匡済会は川崎町に第二労働者合宿所を建設すること、敷地は私有地を借り入れるため広大な面積確保が難しく、長屋風の木造 2 階建てとすることを発表した<sup>8)</sup>。翌年 1 月 25 日の『横浜貿易新報』に報じられた建設計画によると、独身の男性労働者 100 名を収容する宿泊室と託児室、授産室等を設けるほか、簡易食堂と公設浴場を付設し宿泊者以外にも開かれた施設とするという<sup>9)</sup>。設計は横浜社会館に続き成富技師が担い<sup>10)</sup>、川崎社会館は 1921（大正 10）年 5 月 1 日、寄棟屋根をもつ和風意匠の木造 2 階建ての建物として開館された。なお、宿泊者の感想から宿泊室の床をキルク材で敷いた<sup>11)</sup> ことが確認でき、横浜社会館との共通点が窺えた。

## ■ まとめ

1921（大正 10）年に建てられた横浜社会館と川崎社会館は労働者向け施設として計画されたものの、低給生活者等の生活まで支えた、神奈川県における先進的な社会施設として機能した。

まず、横浜社会館は洋風意匠の鉄筋コンクリート造 3 階建てとして竣工され、中には理髪室や簡易食堂など、宿泊者以外でも利用できる空間を設けていた。川崎社会館は洋風意匠の木造 2 階建てとして竣工され、付設食堂や浴場を設け一体的な社会施設として成り立った。このことから、ある種の総合的な社会施設としての性格が、建築意匠や構造に反映されたと考えられる。両施設とも共同生活をなす空間として衛生面に留意して計画され、設計は神奈川県内務課建築技師・成富又二が担ったことが明らかとなった。なお、佐野利器も匡済会顧問として設計に関わっていたと推察できる。

【注】1) 神奈川県匡済会『神奈川県匡済会四十五年のあゆみ』神奈川県匡済会、pp. 43-44、1963。2) 前掲注 1)『神奈川県匡済会四十五年のあゆみ』p. 50。3) 横浜貿易新報社「合宿所の敷地 海面埋立補充」『横浜貿易新報』p. 2、1919. 10. 28。4) 横浜貿易新報社「労働者合宿所 一ヶ處建設に決定す」『横浜貿易新報』p. 2、1919. 11. 18。5) 横浜貿易新報社「合宿所の敷地 頗る狭隘」『横浜貿易新報』p. 2、1919. 11. 23。6) 横浜貿易新報社「心持良く寝た社会館の一夜 呑気な労働者達と合宿して鼾聲と鼻唄を聴く 十九日朝社会館にて 糸柳生」『横浜貿易新報』p. 5、1921. 6. 20。7) 注 6 に同じ。8) 横浜貿易新報社「第二合宿 川崎と決定 計費廿三万」『横浜貿易新報』p. 2、1919. 12. 13。9) 横浜貿易新報社「郡部社会施設 川崎宿泊所と附属設備」『横浜貿易新報』p. 2、1920. 1. 25。10) 横浜貿易新報社「川崎社会館開館式 来會者一同食堂で常飯を喫す」『横浜貿易新報』p. 5、1921. 5. 26。11) 福島謎造「川崎社会館宿泊記」『川崎労働史戦前』川崎市、pp. 173~176